



すでに AI が身近な時代に

IBM Watson API を活用したビジネスソリューションコンテスト

## 「IBM Watson® Build Challenge」

日本部門決勝戦の全国から集まった選りすぐり10社の頂点に立ったのは



# 「IBM Watson® Build Challenge」

## 日本部門決勝戦 10社の頂点に立ったのは

2017年10月20日、日本IBM主催でIBM Cloud上のWatson APIを活用したビジネスソリューション・コンテスト「Watson Build Challenge」の日本部門決勝戦 Demo Day が開催された。世界大会進出をかけて10月5日に開催されたグローバル部門日本決勝大会に続いて開催されたもので、グローバル部門で最優秀賞を逸したチームおよび日本部門から参戦チームも含め技術審査予選を勝ち抜いた全10チームが参加。レベルの高いプレゼンテーションを繰り広げた。

※ IBM Bluemix は、「IBM Cloud」にブランド名称が統一されました。

### Watson API を活用した革新的な アプリを競う

Watson Build Challengeに参加したのはIBMのビジネス・パートナー。4月に大会が発表されてから日本IBMによる「デザイン思考ワークショップ」や Bluemix ハンズオンが全国で開催された。パートナーはそれらを通じオープンイノベーションやIBMのコグニティブ・ソリューションを習得し、ビジネスプラン提出の一次審査、プロトタイプを作成した二次審査に挑戦し、最終的にその中から選ばれた10チームが日本部門の決勝戦に参加した。

グローバル部門では、グローバルレベルでのビジネスを視野に入れたパートナーを対象に実施、最優秀賞（日本地区代表）に選出されるとニューヨークで世界大会への参加やIBM コーポレーションによるプロモーションが約束される。日本部門では主に日本市場を主眼においたビジネスソリューションが中心になり、日本語での開発だけでも参加できる。それだけに、グローバル部門に比べて取り組みやすいが、ビジネスプランの応募、プロトタイプ作成、そして決勝戦でのデモというプロセスはグローバル部門と同様だ。7分間のプレゼンテーションと3分間の質疑応答という発表スタイルもグローバル部門と変わらない。

IBMでは、Watson Build Challengeを通じて、Watson APIを含むIBM Cloudを使ったサービス開発とイノベーションを、机上ではなく実体験を通じて学んでもらうことを狙いとしている。そのため従来のウォーターフォール型開発とは異なる、アジャイル、デザイン思考、APIといった開発手法、プロセスを学ぶための機会としても活用できるよう間口を広く開催した。また参加者にとっても、こうした学びのほか、近年、シリコンバレーのスタートアップ企業などに取り入れられ注目されているピッチ形式でショートプレゼンテーションを多くの人の前で行う絶好の機会となっている。

日本部門決勝に残ったのは、以下の10チーム。グローバル部門の決勝戦に進出したものの惜しくも最優秀賞を逃したチームも、雪辱を期して参加している。



Watson Build Challenge 日本部門決勝戦

# 「IBM Watson® Build Challenge」

## 日本部門決勝戦 10社の頂点に立ったのは

### 日本部門決勝に進出した10チームのアプリケーション

会社名	チーム名	アプリケーション名
情報技術開発株式会社	感覚的に探したいんです	「Sensitive Search」
株式会社インターワーク	インターワーク	「AI 観光案内ボット」
コムチュア株式会社	WatsonComture	「PeReRe」
株式会社メトロ	Great Developer Metro	「Great Teacher Watson (GTW)」
株式会社エクサ	Challenger	「旅行プランニングコンシェルジュ」
株式会社オーイーシー	WAVE OEC	「Virtual Roleplayer」
株式会社イノス	イノス コグニティブ ワーク ショップ	「せんせいごっこ」
株式会社 JIEC	チーム追い風	「追い風」
ティアックオンキョーソリューションズ株式会社	Foodcoach	「フードコーチ」
株式会社セイノー情報サービス	物流働き方改革	「シェアリング・トラック」

# 「IBM Watson® Build Challenge」

## 日本部門決勝戦 10社の頂点に立ったのは

### 今日の社会課題を解決するアプリが受賞

日本部門の審査を務めたのは、審査員長の日本 IBM 執行役員 パートナー事業アライアンス事業統括本部長である岡田和敏氏をはじめ、Tokyo City リーダーとして Developer Advocate をリードする大西彰氏など日本 IBM の 10 人。応募したサービスの技術性、革新性、市場魅力度など、様々な観点からサービスを評価した。

10 チームの中から優勝の栄誉を勝ち取ったのは、ティアックオンキョーソリューションズが開発した「フードコーチ」。スポーツ選手専門栄養士の不足を背景に、栄養指導などを IBM Watson を活用して行うことで、これまで栄養士の指導が受けにくかった学生アスリートなどが手軽に栄養指導を受けられるようにするというものだ。フードコーチはグローバル部門にもエントリーし準優勝となり、その際に「優勝を狙っていたので悔しいです」と話していたが、今回は見事に優勝に輝き雪辱を果たした。

準優勝は、セイノー情報サービスの「シェリング・トラック」とオーイーシーの「Virtual Roleplayer」が受賞した。シェリング・トラックは、トラックの積載状況を写真で把握し配送の無駄軽減を目指すアプリケーション。一方、Virtual Roleplayer は、外国人が VR 上で IBM Watson を活用したアバターと会話することで、適切な日本語対応を学ぶコミュニケーション学習アプリケーションだ。いずれもグローバル部門でもエントリーし、輸送スペースマッチングは準優勝に輝いている。さらに、聴衆の投票で選ばれるオーディエンス賞には、メトロが開発した教員自身が持つ経験や知識といった教育の“秘訣”を学校で利用する既存データに加え、教員や学校運営に役に立つ知見を導き出す教育業界向け生徒指導支援サービス「Great Teacher Watson (GTW)」が選ばれた。

審査を終えた審査員からは、「サービスの完成度を高めることはもちろんだが、プレゼンテーションでどう見せるのかも重要なポイント。ぜひ、磨きをかけてほしい」とコメントがあった。グローバル部門と日本部門の両方に参加したチームは、いずれも今回の日本部門決勝戦の方が、よりわかりやすく充実した内容となっていた。7分という限られた時間で多くの聴衆を前にどのようなプレゼンテーションを行えば効果的なのか——。日本人が苦手とする効果的なプレゼンテーションというものも、ビジネスにおけるイノベーションには必要とされている。そうした意味でも、今回のコンテストは参加者に大きな意味があったようだ。

審査員からは、「真の勝者は、開発したサービスによってビジネス業績がどれだけ伸びるかということ。今日はスタート地点であり、日本 IBM としても皆さんのビジネスをサポートしていきたい」という声や、「今回の経験を生かして、IBM Cloud をコグニティブビジネスに活用してお客様の真の課題解決を IBM と一緒に解決してほしい」といった声があがっていた。



優勝したティアックオンキョーソリューションズ

# 「IBM Watson® Build Challenge」

## 日本部門決勝戦 10社の頂点に立ったのは

### インタビュー

今回の受賞をきっかけに、さらなる Watson 活用を目指す

審査を終えて、最優秀賞のティアックオンキョーソリューションズ 代表取締役社長 松本友伯氏、準優賞のセイノー情報サービス 知識ベース推進室 主任 石井哲治氏、オーイーシー ソリューション営業グループ 工藤 翔吾氏、オーディエンス賞のメトロ 営業推進室 齋藤 由佳氏に話を聞いた。

——今回は、グローバル部門にもエントリーした3チームが優勝、準優勝に輝きましたが、審査後にアプリケーションやプレゼンテーションに改良など加えたのですか。

**松本氏（ティアックオンキョーソリューションズ）：**  
グローバル部門に出場して優勝を目指すという目標を立てていたものの準優勝に終わり、大変悔しい思いをしました。それで日本部門に出場したのですが、今回も優勝は難しいのではないかという思いもあり、今回の優勝は素直に嬉しいです。

**石井氏（セイノー情報サービス）：**当社もグローバル部門に出場して準優勝だったのですが、今回の日本部門で再度プレゼンテーションを行うことができたことは貴重な機会となりました。グローバル部門のプレゼンテーションから2週間しかなかったため、仕組みを大きく変更することは難しかったのですが、聴衆に伝わりやすい部分を見直すなどしてプレゼンテーションを工夫しました。

**工藤氏（オーイーシー）：**グローバル部門では思い通りのプレゼンができず、今回の日本部門でリベンジをするために、市場・顧客のターゲットをより具体的なものにするなどブラッシュアップして発表に臨みました。今回、準優勝を受賞できたことで、ようやくスタートラインに立つことができたと感じています。

——オーディエンス賞を受賞したメトロさん、受賞されたご感想をお聞かせください。



ティアックオンキョーソリューションズ株式会社  
代表取締役社長 松本友伯氏



株式会社セイノー情報サービス  
知識ベース推進室 主任 石井哲治氏



株式会社オーイーシー  
ソリューション営業グループ 工藤翔吾氏

# 「IBM Watson® Build Challenge」

## 日本部門決勝戦 10社の頂点に立ったのは

**齋藤氏（メトロ）：**優勝を狙っていたので少し残念なのですが、聴衆の皆さんに支持されて光栄です。当社は、本社は東京ですが、450人の社員のうち300人が静岡県沼津市で勤務しています。地方で事業を行う中で耳にした課題を解決するために開発したのが「Great Teacher Watson (GTW)」です。約5人体制で、1カ月の期間をかけて開発しました

——今回 Watson Challenge に参加した意義や今後の抱負などを聞かせてください。

**松本氏：**今年度、企業として新しい技術に取り組むということで AI をビジネスに活用するという目標を掲げました。その第一弾が今回プレゼンテーションした「フードコーチ」です。Watson Build Challenge に参加することで、AI を使ったサービス作りを自然の流れの中で学ぶことができ、自社のビジネスにとって大きなプラスになったと思います。

**石井氏：**人工知能を活用すべしということがトップダウンで決定され、今回のコンテストで Watson 活用の成

果を残すことができました。物流の課題改善は大きな課題だけでなく、今後も AI を活用することで物流課題改善に取り組んでいきたいと考えています。例えば送り状画像の自動認識など、AI 活用で現在の課題が解決できる部分はたくさんあると思います。

**工藤氏：**社内で AI、IoT、VRなどをキーワードとして新しいビジネスに取り組む中で、事業部門の十数人のチームでアイデアを出し合いました。そこから開発部門のスタッフ6人で、Watson API の Speech To Text、Text To Speech、Conversation、Tone Analyzer を活用し、約2カ月かけてプロトタイプを開発しました。日本 IBM のメンターの方のサポートで、技術的な部分ばかりでなく、ビジネスにどうつなげていくのかといったアドバイスもたいへん参考になりました。今後は「Virtual Roleplayer」の実ビジネス化に向けて取り組んでいきたいと思っています。

**齋藤氏：**私たちがビジネスプラン策定の部分で IBM のメンターの方にサポートしていただき助かりました。開発に関しては、社内教育という狙いもあり、あえて普段 IBM Cloud を使っていないメンバーが担当しました。今回は地方で行っている事業をベースにサービスのアイデアが生まれましたが、当社では静岡でスーパーコンピューター、東京でセキュリティと様々な事業を展開しています。今後は実ビジネスの中で AI の活用を目指していきたいと思っています。

インタビュー終了後には、入賞者同士が名刺交換する場面もあった。「こうした大会に参加することで、横のつながり、つまりエコシステムが生まれることもプラス効果のひとつ」という審査員のコメントがあったが、まさにそれが実践されていたと言えよう。今回の DEMO Day をきっかけに、さらに磨きのかかったサービスの誕生、各社の連携による新たなビジネスの誕生なども期待できそうだ。



株式会社メトロ  
営業推進室 齋藤由佳氏